

滋賀短期大学令和5年度入学式 式辞

今年は桜の咲くのが早く、大学の校門の桜も4月を待たずに満開になってしまい、皆さんが来るのを待てなかったようです。そのかわり、今年から2回生になる在校生、私たち教職員が心を満開にして皆さんを待っています。

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。ようこそ滋賀短期大学へ！保護者やご家族のみなさんも、おめでとうございます。今年の入学式は、この津市民会館を会場にしたため、皆さまにも会場にお入りいただくことができました。大切なお子様たちを、本学にゆだねてくださったことに対して、教職員を代表して心から御礼申し上げます。

そして本日、みなさんのために、ご多忙の中をご臨席いただいているご来賓の方々にも御礼を申し上げます。日頃から厚いご支援をいただいております、本当にありがとうございます。

2020年の春から始まった新型コロナウイルスの感染のため、長い間皆さんは行動を大幅に制限され、高等学校での一番楽しいはずの生活が、十分におくれなかったかもしれません。幸いなことに感染はようやく終息に向かって見えます。まだ注意は必要ですが、5月からは取り扱いも変わり、コロナ以前の状態に戻っていくように思います。今年がアフターコロナ元年になるように期待しています。

コロナ禍の中で過ごした学校生活は、いろいろな問題があったと思いますが、私が一番問題だと思っているのは、お互いにしゃべらないとか、一緒に食事をしないとか、できるだけ人と人との接触、コミュニケーションを控えるような習慣が身につけていることです。お互いに話す時もマスクをしたままで、表情がわからないまま会話しています。こういう状態が当たり前になっていたこの3年間、一番元気で過ごすはずの時期をこういう形でおくった皆さん、どうか元気なコミュニケーションを取り戻してください。

マスクをしなくてもいいような生活が普通になると、友達どうしのコミュニケーションや、大学でもグループで学んでいく授業が戻ってくると思います。コロナを忘れるわけではありませんが、コロナにとらわれない生活を取り戻しましょう。

さてこの3月、皆さんにとって一番ホットな話題は何だったのでしょうか。まず挙げられるのはWBC（ワールドベースボールクラシックス）での日本代表チームの活躍ではないでしょうか。大谷翔平選手だけではなく、全選手のすばらしい活躍、手に汗を握る劇的な試合に歓声を挙げた人も多かったと思います。日本にアメリカ人から野球が伝えられたのが明治5年（1872）と言われておりますから、それからちょうど150年が経つわけ

ですが、いまや日本の野球も名実ともにアメリカに肩を並べる力をもっているといえるのではないのでしょうか。

WBCでは、2006年の第1回、2009年の第2回も日本が優勝していますが、第1回の時の王貞治監督率いる日本代表チームには、シアトル・マリナーズのイチローと、テキサス・レンジャーズの大塚の2人しか、大リーグ所属の選手はいませんでした。しかし今回の日本代表チームには、大リーガーが大谷を含め4人います。またダルビッシュ有選手、ラズ・ヌートバー選手のように、日本人でない母親や父親をもつ選手も含まれていました。

アメリカ大リーグのチームでは、国籍や人種民族の異なる選手が多数所属しているのがあたりまえですが、日本ではプロ野球チームに外国人選手がいるのは確かですが、今回の日本代表チームにこのように多様な選手が選ばれていることは、日本社会の国際化、多様化が進んでいることを示すものではないのでしょうか。

また日本代表チームのマナーや他チームとの関りなども、ずいぶん好意をもって取り上げられました。これは日本人の他者に対する心配り、集団全体を大切にする意識が、よい方向に評価された結果のように思います。これらの特性が過剰に出ると、往々にして日本人の欠点のように言われることもあるのですが、それが世界の場で評価されたことは、日本人のアイデンティティを考えるよい材料になるのではないかと考えています。

しかしWBCで日本が準決勝でメキシコを劇的にサヨナラで破った3月22日、日本の岸田首相が、インドからポーランドを経由してウクライナのキーウを電撃的に訪問していました。その前日には、中国の習近平主席がロシアを訪問して、プーチン大統領と会談しています。ウクライナをめぐる、欧米の側に立つ日本と、ロシアの側に立つ中国が、同時に積極的な動きを見せたことになります。しかしそのような動きにかかわらず、これからのウクライナ戦争がどのようなようになるのか、まったく予想のできない状態が続いています。

ウクライナだけではなく、世界では各地で対立が続いている地域があり、日本に近い東アジアでも東南アジアでも、人々が十分に安心して暮らせる状態でないところがたくさんあります。

一方でWBCのように20カ国がスポーツでしのぎをけずり、世界中の熱い視線が注がれているかと思えば、別のところでは悲惨な戦争が継続され、多くの生命が失われ、それをめぐって世界が分断されている。このように複雑で錯綜する国際情勢の中で、日本

がどのような役割を果たせばいいのか、私たち一人一人の国民は何ができるのか、簡単に答えはだせません。しかしこういうことも、すでに選挙権をもっている皆さんにぜひ考えてほしいと思います。

選挙権といえば、いま統一地方選挙ということで津市内でもポスターを張った掲示板が街角の至る所にあります。皆さんはこの選挙に投票しに行こうと思っていますか。選挙や政治なんて、自分たちには関係ないと思っているかもしれませんが、そうではなく社会人となっていく皆さんにとって、とても大事なことだということは、これから学んでほしいと思います。

選挙はさておいて、自分たちの住んでいる地域のことを考えたり、その地域のためにできることをするというのを、これから大学生としてぜひ身につけてほしいと思います。Think globally Act Locally（グローバルに考えローカルに行動せよ）という言い方があります。グローバルとローカルは対極にある方向ですが、どちらも私たちが身に付けなければいけないものだと思います。これからの世界がどうなるのかを想像できるとと、津市がこれからどのように発展していくのか考えることは、つながっていると思ってほしいのです。

私たちの滋賀短期大学では、地域との連携ということをとくに大学全体の大きな方針として掲げています。滋賀短期大学で学ぶ専門分野を生かし、将来、様々な分野で地域を支える人材に育ててほしいというのが私たちの願いです。

これをもって入学に当たって私から皆さんへのことばとします。

令和5年4月4日

純美禮学園理事長

滋賀短期大学学長

秋山元秀